



桂スチール

高層・大型の建築物に使われる鉄骨「ビルトH形鋼（BH）」の国内トップメーカー・桂スチール（兵庫県姫路市）は、岡山県内で生産設備の増強を進めている。昨年9月に本格稼働させた友延工場（備前市友延）をはじめ、同市や玉野市の工場で最新の切断機や溶接ロボットなどを導入した。新型コロナウイルスの影響で業界の動向は不透明だが、生産効率を上げて利益の確保につなげる。

（河内慎太郎）

最新切断機、溶接ロボ

同社は大型や長尺、特殊形状のBHを得意とし、県内6工場で工程を分担しながら鋼板を切断、溶接してBHを製造。穴を開けたり、梁に加工したり、BHとT形鋼を組み合わせて十字の形に仕上げたりしている。

友延工場（敷地約4万9700平方メートル、鉄骨平屋約7千平方メートル）はBHの製造と梁加工を担当し、敷地内に門型クレーン6基を備える。本格稼働に伴って全社的なBHの生産能力は1割程度アップし、最大で月1万ト近い供給が可能となった。今年2月には50％の

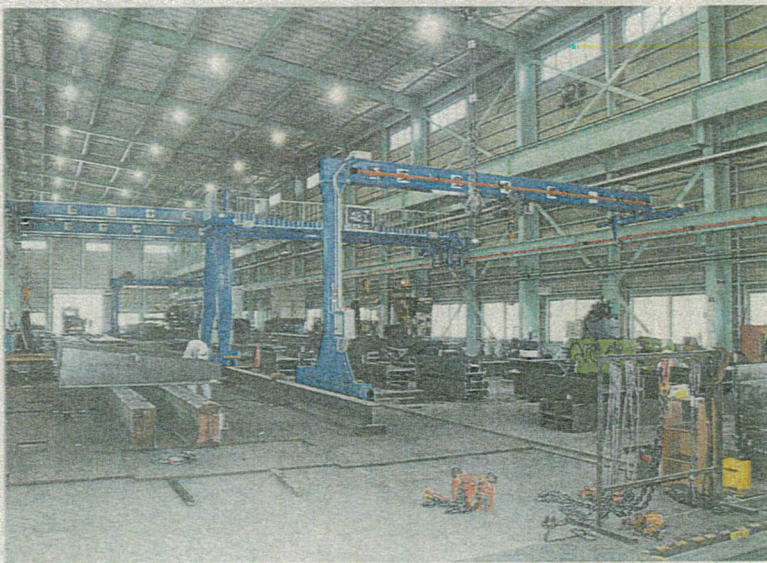
厚板に対応するプラズマ切断機を1台設置した。比ベ2倍以上となった。切断箇所のマスキングが自動化され、加工速度

は従来のレーザー切断に比べて2倍以上となった。3月には梁の溶接ロボットも1機導入。これらにより、作業者が複数機の機械を同時に操作したり、別の工程を拒ったりできるようになった。投資額は約1億円。

今年に入り、玉野工場（玉野市宇野）にも同タイプの切断機を設置。岡山第1工場（備前市吉永町神根本）には、作業者が複数機の機械を同時に操作したり、別の工程を拒ったりできるようになった。投資額は約1億円。

友延工場では太陽光発電設備の整備も順次進めており、工場内の電力を賄うほか、今後は売電も予定する。同社の三木桂吾社長は「工場設備の自動化・省人化や脱炭素化に取り組み、コロナ禍でも利益を上げられるようにしていきたい」と話している。

昨年9月に本格稼働し、効率化投資を進めている桂スチールの友延工場



前市吉永町神根本）でBHを精密切断する機械を更新し、岡山第3工場（同市三石）には組み合わせた形鋼を溶接するロボットを新設した。岡山第5工場（同

岡山県内
設備増強
省人、脱炭素化推進

同社は1985年設立、資本金5750万円、売上高116億7900万円（20年9月期）、従業員約200人。